

BAUDELAIRE の死を祓う詩的手法 (1)

南 直 樹*

はじめに

BAUDELAIRE は « Les Fleurs du Mal » の序詩 *Au Lecteur* の中に次のような詩句を書いている。

Serré, fourmillant, comme un million d'herminthes,
 Dans nos cerveaux rivole un peuple de Démons,
 Et, quand nous respirons, la Mort dans nos poumons
 24 Descend, fleuve invisible, avec de sourdes plaintes.¹⁾

「百万匹の蛔虫のように、ひしめき蟻めいてうようよと、私たちの脳髄の中では、〈悪魔〉の大群が大酒盛り、そして息するたびに、〈死〉は目に見えぬ大河をなして、鈍い嘆きの音を立てつつ、肺の中へ流れ込む」(v.21-24)。私たちの「脳髄」のなかの悪魔は、「魔王トリスメジスト」の操る「愚かさ」「誤り」「罪」「吝嗇」「悔恨」などであり、そして BAUDELAIRE にあってはなによりも「倦怠」である。それは「大仰な身振りもせず大きな声も立てないが、進んで地球を廃墟にしてしまうことも、ひと欠伸にこの世を呑み込むこともやりかね

* 福岡大学人文学部教授

ない」^{デリケート}「繊細な怪物」である。そうした悪の支配する悲惨な状況に置かれた人間の行き着く目的地は、もはや「死」以外のものではありえない。呼吸の総数が増すことは、それだけ時間を経て年齢^{とし}を重ねてゆくことの証であり、人は一呼吸するごとに生命^{いのち}を吐き出し、死を吸い込んでいるのである。「すべての人は死す」が絶対的な真実としてある以上、その只中で、誰ももはやその「自由意志」を活用することはできない。「神は死んだ」現代において、死は人間にとって乗り越え難いアポリアとしてある。

しかし BAUDELAIRE は、我々の有限性に、この死すべき運命に、少なくとも詩的世界において反駁し、死を前にした人間の自律性の喪失を退けようとする。J.E.JACKSON は、そうした死を前にした BAUDELAIRE の詩的態度を次のように説明する。

Charles BAUDELAIRE が、フランス詩の中に、そしてヨーロッパ詩の中に導き入れた根源的な新しさは、——それがこの本が明らかにしようとしているテーマなのだが——実際、現実の知覚の炉としての死の同一視、内在化に基づく。Les Fleurs du Mal の詩的意識は、それが死の意識であるという事実の中に、その単一性と同時に焦点を見出す。²⁾

こうして BAUDELAIRE は死を恐れて、それを忌避したり遠ざけたりするのではなく、死を詩のテーマのひとつとして採り上げ、様々な詩的手法を用いて、死を祓い、時には死を超越しようとする。

I

尋常ならざる次元での美の創造は、そうした詩的手法の第一を構成する。それは詩篇 *La Beauté* に描き出されたような美である。

Je suis belle, ô mortels! comme un rêve de pierre,
 Et mon sein, où chacun s'est meurtri tour à tour,
 Est fait pour inspirer au poète un amour
 4 Éternel et meurt ainsi que la matière.³⁾

「おお人間たちよ！私は美しい、石の夢のように、そして人々がかわるがわる触れては傷ついた私の胸は、物質と同じように永遠で無言の愛を詩人の心に呼び覚ますように作られている」(v.1-4)。死すべき存在である人間に対比して、石という堅固な物質の恒常性を媒介として具現する夢の美が対置されている。そして「〈美〉への愛、〈美〉との格闘は芸術家を敗北させ傷つけぬにはおかぬという思念」⁴⁾が表明されている。そして美の「不感無覚」の至高の存在が次のように描き出される。

Je trône dans l'azur comme un sphinx incompris;
 J'unis un cœur de neige à la blancheur des cygnes;
 Je hais le mouvement qui déplace les lignes,
 8 Et jamais je ne pleure et jamais je ne ris.⁵⁾

「私は不可解なスフィンクスのように青空に君臨する。私は雪の心臓を白鳥の白さに結び合わせる。私は線を動かす運動を憎む、決して私は泣かない、決して私は笑わない」(v.5-8)。この「美」の「この上もなく誇らかな記念建造物から借りたかに見える」「堂々たる態度を前にして、詩人たちは厳しい研鑽に彼らの日々を使い果たすだろう」。なぜならこの美は「これら従順な恋人たちを金縛りにすべく、万物をより美しくする澄んだ鏡」である「眼」、「永遠の光を湛えたおおきな眼」を持っているからである。「美」は「美しい現象物すべてを決定する本質」であり、「美女の眼の輝きこそは、他のすべての欠点を覆

い隠して、男性を「従順な恋人」と化する魔力をもつ」⁶⁾ (阿部良雄)。こうして「美」は、有限な人間存在を超える。

BAUDELAIRE は、こうした死すべき運命を超える美の様態を描き出すために、*L'Idéal* と *La Géante* において美を構成する形態と色彩に関して、意識的に過度に使われた表現を用いて死を祓おうとする。BAUDELAIRE は彼の芸術のなかに行き過ぎを導入しようとし、その時その行き過ぎは死そのものへの挑戦を構成するであろう。*L'Idéal* は情念によって亢進した心の怒りが引き起こす痙攣した美のひとつの形の特徴を持っている。詩人は彼の心を満足させ、彼の「真紅の理想に似かよう」ものは、「飾り版画の美女」や「ろくでなしの世紀の産んだ疵もの商品である」「編上靴の足」や「カスターネットを握った指」あるいは施療院の美女たちの囁る群^{さえず}のような凡庸な「蒼ざめた薔薇たち」ではないとして次のように述べる。

Ce qu'il faut à ce cœur profond comme un abîme,
C'est vous, Lady Macbeth, âme puissante au crime,
11 Rêve d'Eschyle éclos au climat des autans;

Ou bien toi, grande Nuit, fille de Michel-Ange,
Qui tors paisiblement dans une pose étrange
14 Tes appas façonnés aux bouches des Titans!⁷⁾

「深淵のように深いこの心に必要なのは、貴女^{あなた}、マクベス夫人、犯罪に力強い魂、疾風の風土に花咲いたアイスキュロスの夢。さもなければ君、ミケランジェロの娘である偉大な〈夜〉、巨人族の口に合うように作られた君の姿態を、奇怪なポーズで穏やかにくねらせるものよ！」(v.9-14)。マクベス夫人は、夫の軟弱さをなじり、さらにうろたえるマクベスの手から血塗られた剣を奪い取り

自らの手も血に染める烈女であり、「アイスキュロスの夢」とは『アガメムノン』に出る、夫アガメムノンを殺し、運命が変わって息子オレストスに殺される血を恐れない王妃クリュタイメストラのことである。また「ミケランジェロの娘である偉大な〈夜〉」とは、サン・ロレンツォ教会のメディチ礼拝堂にあるジュリアーノ・デ・メディチの墓を飾るミケランジェロ作の男女一對の彫像《昼》と《夜》のそれであり、ギリシャ神話では「夜」は「混沌」の娘であり、「眠り」と「死」「夢」などの母である。阿部良雄はこの詩について、「^{ヴィニエット}「飾り版画」やカヴァルニの版画に代表されるような、流行としてのロマン主義のかわいらしさを否定して、力強いもの、énorme 法外＝巨大なものを礼賛して怪物性に至るロマン主義を定立しようとする」⁸⁾と説明している。

BAUDELAIRE がなすこうした行き過ぎへの参照は *La Géante* という詩では、女巨人を理想とする思想として表明される。彼は *Salon de 1859* のなかで「大きなものに対する私の度し難い偏愛」について次のように語っている

ここで私は(…)一つの告白をしなければならない。それは、私が自然においても芸術においても、他の美点が同じであるとすれば、何によらず大きなものを好むということだ。大きな動物、大きな風景、大きな船、大きな男、大きな女、大きな教会を好む。⁹⁾

若い巨人女の与える堂々とした身丈は、死に対する非常に効果的な保護する砦を構成する、そしてこの砦は詩人に彼の死すべき生成変転の苦悩を持続的に沈めることを可能にする。

Du temps que la Nature en sa verve puissante
Concevait chaque jour des enfants monstrueux,
J'eusse aimé vivre auprès d'une jeune géante,

4 Comme aux pieds d'une reine un chat voluptueux.¹⁰⁾

「その昔、〈自然〉が力強い綺想に溢れて、日ごとに奇怪な子供たちを身ごもっていた頃、うら若い女巨人の傍らに、私は好んで暮らしたことだろう、まるで、女王の足元に逸楽をむさぼる猫のように」(v.1-4)。v.3 はいわゆる条件法過去第二形を用いた非現実的な仮定の推測であるが、むしろ詩人の強い願望を表したものであろう。そして BAUDELAIRE は同じ *Salon de 1859* のなかに、次のような芸術的概念を表明している。

私は、在るところのものを表象するには無用かつ退屈なことと思う、なぜなら在るところのもの何一つとして私を満足させはしないからだ。自然は醜い、そして私は私の幻想の生み出す怪物たちを、実証的な卑近事よりも好む。¹¹⁾

この詩人の超自然主義によって生み出された、自然の奔放な想像力の産物である巨大な女は、BAUDELAIRE が終生求め続けた保護する母の形象を思い起こさせながら、次のように描き出される。

Parcourir à loisir ses magnifiques formes;
Ramper sur le versant de ses genoux énormes,
11 Et parfois en été, quand les soleils malsains,

Laisse, la font s'étendre à travers la campagne,
Dormir nonchalamment à l'ombre de ses seins,
14 Comme un hameau paisible au pied d'une montagne.¹²⁾

「その素晴らしい姿態の上を、心まかせに歩きまわり、その巨大な膝の斜面を這い登り、また時として、夏に、不健康な日射しが、^う倦み疲れた彼女を、野に長々と寝そべらせる時、その乳房の蔭に、のんびりと眠っただろう、まるで山の麓^{ふもと}に横たわるのどかな村落のように」(v.9-14)。ここには、あの *L'Invitation au voyage* と反響をなす、幸福^{アンチミテ}の内奥性へ到達するための迂回した手段が見いだされる。このような逸楽について、J. P. SARTRE は BAUDELAIRE に対して半ば批判的に、半ばある種の共感をもって、「巨大な女の視線をひきつけ、その眼を通して自分を飼い馴らされた動物として眺めること、巨大な男、つまり神人たちが彼のために、彼と相談もせずに、世界の意味と彼の人生の最終目標を決めてくれる貴族的な社会で、猫のように遊惰で、逸乐的な、邪悪な生活を送ること、これが BAUDELAIRE の心からの願いなのである」¹³⁾ とし、「彼が幼年時代を懐かしむとすれば、それは幼年時代には生きる労苦から解放されていたからであり、叱りながらも彼のことを気遣ってくれる、優しい大人たちにとって、彼は完全に、また贅沢に物であったからである。幼年時代には——またこの時代だけ——彼は自分が一つの視線にすっかり包まれていると感じる夢を実現することができたからである」¹⁴⁾ と解説する。失われた幼年時代への懐古は、現実^{くびき}の頸木の下で苦しむ詩人を救う数少ない瞬間の一つであった。

こうしてこれらの詩は超人間的な美への感動的な呼びかけによって、現実の超越を実現していると言うことができる。そして BAUDELAIRE はそこで産み出される過度のせいで、現実の偶発性を免れる精神的な^{スピリチュエル}価値の思想を流布させている。

II

この第一の詩的手法が、事物の全体的な過度な発露によって死を祓うことを目標にしていたのに対して、第二のそれは反対にこの幸福の伝播の意図的な停

止、しばしの間でも生がいつもその寛大な分配者とは限らない特権的な瞬間の生成の不動化を試みることによって死を祓おうとする。そして BAUDELAIRE は諸存在の全的意味を理解し、その精髓を十全に味あうためにそれらを飼い馴らし、その時この移ろいやすい瞬間の含む感動が全的な輝きのなかで飛び出してくる。

こうして *Le Chat* という詩の中で、BAUDELAIRE は世界との情緒的感情を害する接触の源を構成するであろうものを削除しようと努めようとする。BAUDELAIRE が猫を偏愛したことは、*Fusées* の中の「なぜ民主主義者は猫を好まないか、その理由を見抜くのはやさしい。猫は美しい。それは贅沢、清潔、快樂、等などの観念を啓示する」¹⁵⁾ という言葉から知れる。

Viens, mon beau chat, sur mon cœur amoureux;
Retiens les griffes de ta patte,
Et laisse-moi plonger dans tes beaux yeux,
4 Mêlés de métal et d'agate.¹⁶⁾

「おいで、私の美しい猫、恋に脈打つ私の心臓の上に。その足の爪は引っこめて、金属と瑪瑙^{めのう}の混じり合う、君の美しい眼の中に私を飛び込ませてくれ」(v.1-4)。詩人の心臓=心は、感じられずにはおかない優しい猫の足と親和しようとし、次いで詩人の眼は、恒久性を表す「金属と瑪瑙の混じり合う」猫の眼の中に飛び込んで、美と合一することを願う。ここには「視覚によって、しかも視覚をこえて、その向こうにひろがる世界へ泳いで行こうとする者の姿が感じられる」¹⁷⁾ (悪の花注射)。J. P. RICHARD はこの猫について、「潜在性がまさに至福のなかに体现している。何一つ実現しないが、柔かい肉、秘密めざした眼差し、電気を帯びた皮、これらは何か生まれるだろうことを予告している。怠惰が、飛躍を熟れさせているかのようだ。強烈な電気は、何か或る美を生むかもしれない。現実は、柔軟性を帯

びて可能性に膨らんでいる。本当の生命が始まるのは明日である。今は、もっぱら閑暇の日である』¹⁸⁾と解説する。こうして感覚の融合は、この特権的な瞬間の持続を引き伸ばす効果を持ち、BAUDELAIREにおける死を祓う永遠の願望を証言する。

Le Léthé のなかで、彼にとって快樂の素材を構成するであろうものを、同じように飼い馴らそうとする BAUDELAIRE のオブセッションを見出す。

Viens sur mon cœur, âme cruelle et sourde,
Tigre adoré, monstre aux airs indolents;
Je veux longtemps plonger mes doigts tremblants
4 Dans l'épaisseur de ta crinière lourde;

Dans tes jupons remplis de ton parfum
Ensevenir ma tête endolorie,
Et respirer, comme une fleur flétrie,
8 Le doux relent de mon amour défunt.

Je veux dormir! Dormir plutôt que vivre!
Dans un sommeil aussi doux que la mort,
J'étalerai mes baisers sans remords
12 Sur ton beau corps poli comme le cuivre.¹⁹⁾

「私の心臓の上に来たまえ、藉す耳をもため残酷な心のひとよ、わが愛する虎よ、屈託なげな様子をした怪物よ。きみの重い鬣たてがみの、厚く茂った奥深く、私の震える指先を、長く長く沈めていたい。きみの香りに満たされた下袴ジュボンのなかに苦悩に疼く私の顔をふかふかと埋め、萎れた花さながらに、死んでしまった私の恋の甘くも鼻を刺す残り香を嗅いでいたい。私は眠りたい！生きるよりは眠

りたい！死と同じほど甘美な眠りの中で、悔いもなく私は接吻くちづけを繰り返りひろげよう、銅のように艶あかがねのよいきみの美しい身体からだの上に」（v.1-12）。「レーテはギリシャ語で忘却を意味し、黄泉の国を流れる河の一つ。亡者はその水を飲んで地上の過去を忘れ、まら、ふたたび地上に出て新しい肉体を求めようする霊は、逆に、地下の世界の記憶を失い、あらたに人生の苦難に耐える心がまえを得るとも言う」²⁰⁾（阿部良雄）。BAUDELAIRE ここでは、恋人の髪や下袴の中に自己の苦悩を不動化する特権的瞬間を見出し、「死と同じほど甘美な眠り」という幸福な感覚にできる限り強度の情緒を負わせることによって、死そのものを赦おうとしている。この快適な感覚の持続を不動化することによって内的な平和を保持しようとする BAUDELAIRE の態度は、*Semper eadem* や *Chant d'automne* 次のような詩句と共通するものである。

Laissez, laissez mon cœur s'enivrer d'un mensonge,
Plonger dans vos beaux yeux comme un beau songe,
14 Et sommeiller longtemps à l'ombre de vos cils!²¹⁾
(*Semper eadem*)

「お願いだ、私の心が嘘に酔いしれるがままに、美しい夢に沈むにも似てあなたの美しい眼に浸るがままに、あなたの睫毛の蔭にながくまどろむがままにさせておくれ」（v.12-14）。

Courte tâche! La tombe attend; elle est avide!
Ah! laissez-moi, mon front posé sur vos genoux,
Goûter, en regrettant l'été blanc et torride,
28 De l'arrière-saison le rayon jaune et doux!²²⁾
(*Chant d'automne*)

「なんと短い務め！墓は待ちうける。貪欲な墓！ああ！きみの膝の上にこの額をおき、灼熱の真っ白な夏を惜しみつつ、晩秋の黄色く優しい日射しを味わがままにさせたまえ！」(v.25-28)。

Le Jet d'eau という詩のなかで、BAUDELAIRE が恋人の悲しく物憂い姿態にその視線を止めることによって特権化しようとするのは、恋する感情の感動である。

Tes beaux yeux sont las, pauvre amante!
 Reste longtemps, sans les rouvrir,
 Dans cette pose nonchalante
 4 OÙ t' a surprise le plaisir.
 Dans la cour le jet d'eau qui jase
 Et ne se tait ni nuit ni jour,
 Entretient doucement l'extase
 8 OÙ ce soir m'a plongé l'amour.²³⁾

「きみの美しい眼は倦み疲れている、哀れな恋人よ！長くそのままにいたまえ、眼をもう開けずに、快樂がきみを不意にとらえた時の物憂げなその姿態のままに。中庭では噴水のおしゃべり、それは夜も昼も黙ることなく、今宵、愛が私を沈めてくれた恍惚を優しくはぐくむ」(v.1-8)。

Ainsi ton âme qu'incendie
 L'éclair brûlant des voluptés
 S'élançait, rapide et hardie,
 18 Vers les vastes cieux enchantés,
 Puis, elle s'épanche, mourante,

En un flot de triste langueur,
Qui par une invisible pente
23 Descent jusqu'au fond de mon cœur.²⁴⁾

「そのように、逸楽の燃える稲妻に赤々と染められるきみの魂も、魔法にかけられた広大な空へと、速やかに、大胆に飛び立ってゆく。それから、息も絶え絶えに、悲しいけだるさの波となって溢れ出し、目に見えぬ斜面づたいに私の心情の底まで降りてくる」(v.9-23)。ここでも詩人は恋の恍惚のなかに、苦悩する自分を溶け込ませることによって一瞬の平安を得て、死を忘れようと試みている。

À *une passante* は潜在の出会いが突然現実になりうる強度の感動の瞬間について、BAUDELAIRE が書いたもっとも美しい詩である。ここで BAUDELAIRE は最終的にはそうして終わるであろう永遠の別れを忘れるために、「通りすがりの女」の出現によって産み出される稲妻を彼の記憶のもっとも深いところに留めようとする。

La rue assourdissante autour de moi hurlait.
Longue, mince, en grand deuil, douceur majestueuse,
Une femme passa, d'une main fastueuse
4 Soulevant, balançant le feston et l'ourlet;

Agile et noble, avec sa jambe de statue.
Moi, je buvait, crispé comme un extravagant,
Dans son œil, ciel livide où germe l'ouragan,
8 La douceur qui facine et le plaisir qui tue.²⁵⁾

「街路は私の周りで、耳を聳するばかりに喚^{わめ}いていた。丈高く、細^{ほつ}そりとして、正式の喪の装いに、厳かな苦痛を包み、ひとりの女が通りすぎた、棲^{つま}とる片手も堂々と、裳裾^{もすそ}の縁飾り、花模様をゆるやかに打ち振りながら、軽やかに気高く、彫像のような脚をして。私はといえば、気のふれた男のように身をひきつらせ、嵐が芽生える鉛色の空の、彼女の眼のなかに飲んだ、金縛りにする優しさと、命を奪う快樂を」(v.1-8)。この詩は、*Le Peintre de la vie moderne* のなかで定義された現代的な美の構成要素、すなわち「永遠の要素」と「偶発的な要素」の美学を典型的に表す詩であるが、背の高い、細そりした、正式の喪服を着た、すなわち身分の高いと思われるひとりの若い女性の突然の出現にともなう、詩人の肉体の硬直は、詩人が予期せぬこの出会いから、可能な限りのもっとも大きな享樂を引き出すことを示している。「その眼差しが、私をたちまち甦^{ひと}らせた女よ」(v.13)。パリの通りの群衆の喧騒のなか、孤独に討ち捨てられほとんど死んでいた詩人は、女性の眼差しによって甦る。そのとき BAUDELAIRE にあっては一瞬でありながら死を祓うことが可能になる。

これらの詩は、従って、死が支配的な位置を占める世界の只中にあるという BAUDELAIRE の意識のなかにおいて、彼に死を忘れさせるであろう幸福を、しばしの間、汲むことを可能にしている。こうして猫の目、女性の顔の美しさ、あるいは通りすがりの女の眼差しが、BAUDELAIRE にとって死を祓う口実になる。

III

死を退ける BAUDELAIRE によって使われる第三の詩的手法は、死に対する思い出の永続性の優位を主張することによって成り立っている。詩篇 *Les Phares* において BAUDELAIRE は 8 人の偉大な芸術家のその作風、作り出した芸術世界を集約的に表象する「^{メグレイヨン}小型肖像」を描いた後、次のように述べる。

Ces malédictions, ces blasphèmes, ces plaintes,
Ces extases, ces cris, ces pleurs, ces *Te Deum*,
Sont un écho redit par mille labyrinthes;
36 C'est pour les cœurs mortels un divin opium!

C'est un cri répété par mille sentinelles,
Un ordre renvoyé par mille porte-voix;
C'est un phare allumé sur mille citadelles,
40 Un appel de chasseurs perdus dans les grands bois!

Car c'est vraiment, Seigneur, le meilleur témoignage
Que nous puissions donner de notre dignité
Que cet ardent sanglot qui roule d'âge en âge
44 Et viens mourir au bord de votre éternité!²⁶⁾

「これらの呪詛、これらの冒瀆、これらの嘆き、これらの法悦、叫び、涙、これらの讃歌^{テ・デウム}は、無数の迷宮を通して次々に響く一つの木霊^{こだま}、死すべき定めの人間に与えられた神の阿片!それは無数の歩哨の繰り返し伝える一つの叫び、無数の伝送管^{メガフォン}で送りつがれる一つの命令。それは無数の城砦^{とりで}の上に点された一つの燈台、大きな森に踏み迷った狩人たちの呼び声!なぜなら、主よ、それこそはまさに、自らの尊厳を私たちが示すための、こよなき証^{あかし}なのですから、世から世へと流れては、貴方の永遠の岸辺に辿り着いて息絶える、この熱烈な咽び泣きこそは!」(v.33-44)。芸術による自己表現は、死すべき存在の人間が不滅の神に対して自らの尊厳を証す手段であり、それは人間的事象の中で死を超越することのできる数少ないものの一つである。

Une Charogne では、「快い夏の朝」、「とある子径の曲がり角、散り敷く小

石の寝床の上に穢らわしい獣の腐屍^{しかばね}が、淫らな女のように、両脚を宙にかかげて、身を焦がし、毒の汗をにじませながら、投げやりに、臆面もなく、悪臭に満ちた腹を開いて曝^{さら}している」る光景に出会った詩人は恋人にこう宣告する。

—Et pourtant vous serez semblable à cette ordure,

À cette horrible infection,

Étoile de mes yeux, soleil de ma nature,

40 Vous, mon ange et ma passion!

Oui! telle vous serez, ô reine des grâces,

Après les derniers sacrements,

Quand vous irez, sous l'herbe et les floraisons grasses,

44 Mourir parmi les ossements.²⁷⁾

「だがしかし、この汚物、おぞましい悪臭を放つ物に似た姿とあなたもなるだろう、わが眼に星と輝くひと、わが自然に太陽と照るひとよ、わが天使にしてわが情熱なるあなたも！そうとも！このようにあなたもなるだろう、おお優美さの女王よ、臨終の秘蹟も受け終わって、肥え茂る草花の下へ降りてゆき、堆^{うず}みなす骨の間に、あなたも徹^かびて腐るとき」(v.37-44)。「人間は土からとられたものでだから土に返らねばならず、塵だから塵に返らねばならぬという『創世の書』Ⅲ19の思想が、いわば自然主義的な相の下に強調される」²⁸⁾(阿部良雄)。こうして「生と死の物質的循環の場としての自然という観念」を強烈に提示した後で BAUDELAIRE は最後にこう述べる。

Alors, ô ma beauté! dites à la vermine

Qui vous mangera de baisers,

Que j'ai gardé la forme et l'essence divine

48 De mes amours décomposés!²⁹⁾

「その時、おおわが美しきひとよ、^{くちづけ}接吻にあなを蝕む^{むしば}蛆虫どもに、伝えたまえ、わが崩れはてた恋愛の、形と神聖なる本質を、私は心にしかと^{とど}留めたと」(45-48)。「崩れはじめて、追憶のなかからかたち (la forme) と聖なる本質 (l'essence divine) がうかびあがる」³⁰⁾ (「悪の花注釈」)。このプラトニズム的理想主義の思い出によって、死を乗り越えることができると BAUDELAIRE は主張しようとしている。

虚無に対する光のイマージュの勝利は、実際 BAUDELAIRE により多くの晴朗さをもって死を祓うことを可能にする。*Un fantôme* という詩のなかで、突然に湧き出てくる愛する女性の思い出は、時間の压制への挑戦を構成する。

〈運命〉によって、「測り知れぬ深い悲しみの穴蔵」のなかに押し込められた詩人は「仏頂面の女主人〈夜〉とともに独り」、「^{からかい}どこかの揶揄好きな〈神〉によって」、「暗闇の上に描くことを強いられた画家」である。だが「陰惨な貪欲を持つ料理人のように」「自分の心臓を煮立てては食うその場所に」、「優美さと壮麗さからなる亡霊」が「時として輝き、身を伸ばし、練り歩く」。それは「その本来の全き姿に現れ出た時」、「^{オリエント}東方風の夢見がちな歩みぶりゆえ、わが麗しの訪れ女」と知る。「まさに〈彼女〉！色黒くそれでいて輝かしい」。過去の魅力が、苦悩のなかに甦るのである。

Charme profond, magique, dont nous grise

Dans le présent le passé restauré!

Ainsi l'amant sur son corps adoré

8 Du souvenir cueille la fleur exquise.³¹⁾

「現在の中に取り戻された過去がわれわれを酔わせる、深く、魔術的な魅力！
たとえば愛する男は崇める身体の上に思い出の妙なる花を摘む」(II *Le
parfum* v.5-8)。しかし現実には「〈病^{やまい}〉と〈死〉とは、われわれのために燃
えた火のすべてを、化して灰となす」(IV *Le portrait* v.1-2)。

La Maladie et la Mort font des cendres
De tout le feu qui pour nous flamboya.
De cette grands yeux si fervents et si tendres,
4 De cette bouche où mon cœur se noya,

De ces baisers puissants comme un dictame,
De ces transports plus vifs que des rayons,
Que reste-il? C'est affreux, ô mon âme!
8 Rien qu'un dessin fort pâle, aux trois crayons,

Qui, comme moi, meurt dans la solitude,
Et que le Temps, injurieux vieillard,
11 Chaque jour frotte avec son aile rude³²⁾...

「かくも熱烈でかくも優しくあったあれらの大きな眼から、私の心がそこに溺れたあの口から、芳香薬草^{ダイク タモン}のように力強いあれらの接吻^{くちづけ}から、光線よりも鋭いあれらの熱狂から、何が残っているだろう？怖ろしい、おおわが魂よ！ただ一枚の、ごく蒼ざめた、三色の鉛筆画、それは、私と同じく、孤独のなかに死んでゆき、それをまた、無法者の〈時間〉が、日々、粗暴な翼でこすり消す……」(v.3-14)。しかしこの過酷な現実に対して、BAUDELAIRE は思い出の不滅性を次のように宣言する。

Noir assassin de la Vie et de l'Art,
Tu ne tueras jamais dans ma mémoire
14 Celle qui fut mon plaisir et ma gloire!³³⁾

「〈生〉と〈芸術〉との黒い暗殺者よ、汝も私の記憶の中で決して殺すには至らないだろう、わが快樂にしてわが栄光であった女を！」(v.12-14)。阿部良雄はこの詩句について、「記憶の世界からの超自然主義的な出現を通してのみ、昔日の美しさと魅力を十全に取り戻すことができたのである」³⁴⁾と注釈している。

詩篇 *Je te donne ces vers afin que si mon nom* のなかで、BAUDELAIRE は愛する女性に、時間を越えて詩人の名を後世に伝える役割を負わせている。

Je te donne ces vers afin que si mon nom
Aborde heureusement aux époques lointaines,
Et fait rêver un soir les cervelles humaines,
4 Vaisseau favorisé par un grand aquillon,

Ta mémoire, pareille aux fables incertaines,
Fatigue le lecteur ainsi qu'un tympanon,
Et par un fraternel et mystique chaînon
8 Reste comme perdue à mes rimes hautaines;³⁵⁾

「私がこれらの詩句をきみに与えるのは、もしも私の名が仕合わせにも遠く未来の時代に流れ着き、大いなる北風に船さながら、ある宵、人間たちの脳漿を夢想させるなら、その時、きみへの記憶が、定かならぬ伝説にも似て、真鍮琴ツインパロンのように読者の耳を攻め立て、また、友愛の神秘的連鎖により私の尊大な押韻

に懸けられて留まってほしいゆえだ」(v.1-8)。詩の永遠性が愛する女の記憶に託されている。この「呪われた存在」は、「深い淵のそこから天の高みまで」、詩人以外には「答えるものは何もない」。BAUDELAIRE は彼の求める不死性を得ることを確実にするために、*À une passante* におけると同様、恋人に彫像の様相を与える。

— Ô toi qui, comme une ombre à la trace éphémère,

Foules d'un pied léger et un regard serein

Les stupides mortels qui t'ont jugée amère,

14 Statue aux yeux de jais, grand ange au front d'airain!³⁶⁾

「おおきみ、儂^{はかな}き痕の影さながら、きみのことを苦いと思った、愚かな人間どもを、足どりも軽く、眼差しも晴朗に、踏み^{こくきよく}にじる。黒玉の眼をした彫像、青銅の額をした大いなる天使よ！」(v.11-14)。

最後に *L'Aube spirituelle* という詩では、霊的な空の近づき難い蒼空の深淵の吸引力への転倒が示される。この詩は、詩人が娼家に滞在した折、愛する女性 (=M^{me} Sabatier) を想って書かれたとされる。

Des Cieux Spirituels l'inaccessible azur,

Pour l'homme terrassé qui rêve encore et souffre,

7 S'ouvre et s'enfonce avec l'attirance du gouffre.³⁷⁾

「〈霊的な天界〉の、とどくこと及ばぬ蒼空^{あおぞら}は、打ち倒されつなおも夢み、苦悩する男にとって、深遠さながらの吸引力をもって開け、奥まりゆく」(v.5-7)。しかし詩人は愛する女性の不滅の思い出を対置することによって、

その深淵を祓おうとする。

Ainsi, chère Déesse, Être lucide et pur,

Sur les débris fumeux des stupides orgies

Ton souvenir plus chair, plus rose, plus charmant,

11 À mes yeux agrandis voltige incessamment.

Le soleil a noirci la flamme des bougies;

Ainsi, toujours vainqueur, ton fantôme est pareil,

14 Âme resplendissante, à l'immortel soleil!³⁸⁾

「同じように、愛しい〈女神〉よ、冷徹にして純らかな〈存在〉よ、愚かな乱痴気騒ぎの後くすぶる残滓の上に、きみの思い出はいよいよ明るく、薔薇色に、愛らしくなって、大きな開かれた私の目の前に絶え間なく舞い舞う。太陽は蝋燭の炎を黒くさせてしまった。同じく、きみの幻影は、常に勝ち誇って、不滅の太陽に似る、輝きわたる魂よ！」(v8-14)。

これら詩における、思い出の持続性は、BAUDELAIRE の魂のなかで虚無の苦しいオプセッションを弱め、彼にある種の救いをもたらし、死に対する理想の勝利に捧げられている。それ故、それは BAUDELAIRE にとって、精神的な充足を与える数少ない瞬間だったのである。

註

使用テキスト : BAUDELAIRE, *Œuvres complètes*, p.Claude PICHOS, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1975, 1976, 2vols. 以下 O.C., t. I,

O.C., t. II と略記。BAUDELAIRE 詩の訳は阿部良雄訳を使用しているが、適宜変更している。

- 1) O.C., t. I, p.5
- 2) J.E.JACKSON, *La Mort Baudelaire*, la Baconnière, 1982, p.14
- 3) O.C., t. I, p.21
- 4) 阿部良雄訳註「ボードレール全集 I」、筑摩書房、1983、p.491
- 5) O.C., t. I, p.21
- 6) 阿部良雄、*op.cit.*, p.492
- 7) O.C., t. I, p.22
- 8) 阿部良雄、*op.cit.*, p.492
- 9) O.C., t. II, p.646
- 10) O.C., t. I, p.22
- 11) O.C., t. II, p.620
- 12) O.C., t. I, p.23
- 13) J. P. SARTRE, *Baudelaire*, Gallimard, 1947, p.64
- 14) *Ibid.*, p.65
- 15) O.C., t. I, p.662
- 16) *Ibid.*, p.35
- 17) 多田道太郎編「悪の花注釈」平凡社、1988、p.337
- 18) J. P. RICHARD, *Poésie et profondeur*, Seuil, 1955, p.140
- 19) O.C., t. I, p.155-156
- 20) 阿部良雄、*op.cit.*, p.621
- 21) O.C., t. I, p.41
- 22) *Ibid.*, p.57
- 23) *Ibid.*, p.160

- 24) *Ibid.*
- 25) *Ibid.*, p.92
- 26) *Ibid.*, p.14
- 27) *Ibid.*, p.32
- 28) 阿部良雄、*op.cit.*, p.502
- 29) *O.C.*, t. I , p.32
- 30) 多田道太郎、*op.cit.*, p.307
- 31) *O.C.*, t. I , p.39
- 32) *Ibid.*, p.40
- 33) *Ibid.*
- 34) 阿部良雄、*op.cit.*, p.507
- 35) *O.C.*, t. I , p.40
- 36) *Ibid.*, p.41
- 37) *Ibid.*, p.46
- 38) *Ibid.*

参考文献

BAUDELAIRE , *Œuvres complètes*, p.Claude Pichois, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1975, 1976, 2vols.

BAUDELAIRE , *Les Fleurs du Mal*, p.Jacques Crépet et Georges Blin, José Corti, 1942.

BAUDELAIRE , *Les Fleurs du Mal*, p.Antoine Adam, Garniers Frères, « Classiques Garnier », 1961.

BAUDELAIRE, *Petits Poèmes en prose*, p.Robert Kopp, José Corti, 1969.

BAUDELAIRE , *Petits Poèmes en prose*, p.Henri Lemaître, Garniers Frères,

« Classiques Garnier », 1962.

Robert Benoix CHÉRIX, *Commentaires des "Fleurs du Mal"*, Droz, 1962.

René GALAND, *Baudelaire, poétiques et poésie*, Nizet, 1969.

J.-D. HUBERT, *L'Esthétique des "Fleurs du Mal"*, P.Callier, 1953.

J.E. JACKSON, *La mort Baudelaire*, la Baconnière, 1982.

Jean PRÉVOST, *Baudelaire, essai sur l'inspiration et la création poétique*,
Mercure de France, 1964.

Jean Pierre RICHARD, *Poésie et profondeur*, Seuil, 1955.

Mario RICHTER, *BAUDELAIRE, Les Fleurs du Mal, Lecture intégrale*,
Slatkine, 2vols, 2001.

Jean Paul SARTRE, *Baudelaire*, Gallimard, 1947.

阿部良雄訳註『ボードレール全集 I - VI』, 筑摩書房, 1983-1993.

多田道太郎編『悪の花注釈』, 平凡社, 1988.